

「 道 」

生涯教育専攻4回生 岩原 慶郎

僕が過ごした大学4年間をここにつづるわけですが、もちろんすべてをここに書くことはできないので、凝縮しつつ思い出を紐解こうと思います。

まずこの感想文をお願いされた経緯を説明しますと、実はあれは僕がちょうど口答試験を受けている時のことでした。先生方の容赦ない質問攻めの中、その事実はラスト5分で告げられたのです。「今年も生涯教育研究を出すのだけれど、岩原君にも書いてもらいたいんだ。岩原君なら何でもやってきたから書けるでしょ」的なノリで(笑)質問攻めで精神力を使い果たし、また感想文をほとんど書いたことがない僕は内心非常に動揺しました。が、そう言ってもらえたことをすごく光栄に思い、書くことにしたのです。

それではよく小学校の卒業式で行った、呼びかけ風に駆け抜けた4年間を思い出していきます。「どきどき緊張した入学式」大学に入学するということは大人になる第一歩と噛みしめた春だった。「睡魔と闘った90分授業」勉強は自ら進んで行うことと睡魔の恐ろしさを思い知った4年間だった。「大きく見えた先輩の背中」専攻の先輩、学科会の先輩、サークルの先輩などその大きさとまた優しさがすごくまぶしかった。「世間に揉まれた教育実習」楽しさと同時に厳しさも学んだ。「3回生の輝かしき日々」まとめる立場に悪戦苦闘しながらも、監督賞など多くの賞を獲得することができた。「4年間のすべてを注ぎ込んだ卒業論文」4年間の自分の成長を感じ、先生のありがたみを改めて実感した。

こうして振り返ってみましたが、4年間本当に楽しかったし、早かったとも思います。ぶっちゃけるなら「戻れるなら戻りたい、まだ学生をしたい」というのが本音ですね。しかし過去に戻ることはできない。それが現実なんですけど。

ただ、一つ言えるのは、4回生最後の大学祭。生涯教育の半数の人が、実行委員やその上の部署長といった重要な役を任されていました。それは大学祭の下準備から企画書の作成、企業に挨拶回りなどを行う役で、忙しいけれど、人間の成長にとってまたとない機会であり、さまざまな経験やチャレンジができる行事なのです。しかし先生方は、大学祭参加について良いといった顔をせず、逆にやめてほしい的な顔さえしていました。本当に。それはきっと卒論が進まなくなるからあまり良い顔をしなかったのでしょうか。でも先生違うんです!!大学祭は学びと喜びに満ちてるんです!!大学祭を振り返ると笑顔であふれていました。みんなの笑顔で輝いていたんです。だから参加することに対し、もっと応援し、むしろ褒めてくれても良かったんじゃないでしょうか。それが生涯教育としての、学びとしての重要な要素なんじゃないでしょうか。

では最後にありきたりな挨拶では面白くないので、僕は皆さんになぞなぞを出して終わ

りたいと思います。これは追い出しコンパの時にも話したのですが、みんなきっと忘れて
いると思うのでもう一度ここに書きたいと思います。では皆さん真剣に考えてくださいね。
「近くにあると普段は何も感じないのに、遠くに行くと大きく見えてくるものな—に？」
さて何か思いつきましたか？いいですか？答えを発表しますよ？答えは・・・『しあわせ』
です。みなさんわかりましたか？普段、何も気付かずに過ごしている僕らですが、一度自
分の身に不幸が起こると、その幸せだった時が「なんてありがたかったんだろう」と感じ
たことがあるのではないのでしょうか。一つ一つの小さな幸せに気付くと普段の生活は喜び
に溢れたものになると僕は思います。だから普段から小さな幸せと、そして喜びを探して
いこうと思うのです。

幸せは自分のところ次第。大学生活をどう過ごすかも自分のところ次第。卒業式に胸を
張って、学生をやりきったと言えたら素敵ですよ。立派な大人になれとは言いません。
ただ悔いの残らないよう、この瞬間を生きてください。この瞬間を感じてください。
ありがとう天理大学。ありがとう生涯教育。ありがとう・・・みんな。